

## 鍼灸師学生のための医学英語教育

### － ESP に基づいたニーズ分析から －

杉山明枝<sup>1)</sup> カレイラ松崎順子<sup>2)</sup>

#### 要 旨

本稿では、神奈川県内医療系専門学校における鍼灸師学生を対象に実施した質問紙調査をもとに、彼らの英語に対する認識を把握し、医学英語教育に対するニーズを ESP の観点から分析、考察する。

質問紙調査から、学生は外国語（英語）に対し非常に興味を持っているものの、英語学習に対する意欲はあまり高くないため、学生一人ひとりの個性や興味、関心に注意を払いつつ、かつ学習意欲を下げないような工夫を施さなければならないということが分かった。具体的には、作文力に繋がる医療英単語の習得、電子メールやフェイスブックを利用した英作文指導、また英語母語話者教員と日本人英語教員とのチームティーチングによる臨床英会話指導などである。

本稿で実施した質問紙調査の結果は、あくまで一つの傾向に過ぎないが、本稿で得られた結果を踏まえてより効果的な授業実践、並びにシラバス構築に励んでゆきたい。

キーワード：ESP、鍼灸師学生、医学英語教育、チームティーチング、4 技能の習得

#### I. はじめに

医療におけるグローバル化の影響は目覚しく、医療現場では急増する外国人患者に対応できる英語力を身につけた「医療人」が求められている。筆者が「医学英語」を担当する神奈川県内医療系専門学校（柔道整復師・鍼灸師養成校）では、こうした現状もふまえ 1、2 年次において医学英語教育が実施されている。入学試験に英語が課されていないことや、学生の学力や意欲、また学習暦等にばらつきがあること等の事情を照らし合わせて考えると、その内容によってはともすると英語嫌いを生み出してしまいう可能性も考えられる。また、国家試験合格を目標に設定された過密なカリキュラムの中に英語科目を組み入れる以上、学生のニーズを把握、分析し、それに見合った内容の講義を組まなくてはならず、それらを考慮しないままシラバスを作成し授業を実施することは、学生にとって英語が負担になってしまうとも限らない。

そこで本稿では ESP(English for Specific Purposes) の考え方に根ざし、鍼灸師学生に行った質問紙調査を基に彼らの医学英語教育に対する認識を把握するとともに、医学英語教育へのニーズを分析する。さらにこの分析結果を基に、来年度以降の講義内容や形式等について ESP の可能性という観点から考察する。

尚、本研究においては時間的な制約や先行研究の数等、諸般の事情から研究協力校の鍼灸師科学生に対してのみ質問紙調査を実施した。

#### II. ESP とは何か

ESP とは『英語教育用語辞典』<sup>1)</sup> において「ある特定の目的をもって学習され使用される英語のことで、一般的目的の英語 (English for general purposes/EGP) と対照をなす概念」と定義され、「ビジネス英語 (English for business)、看護英語 (English for nursing)」が具体例として挙げられている。ESP は歴史的に、理工学系の領域において始まった英語教育法の一つである<sup>2)</sup> が、近年にお

1) 川崎市立看護短期大学

2) 東京未来大学

いては医療系、または農学系の領域でも常識となり、それはすなわち「ESPが職業上の目標のための英語」<sup>2)</sup>であり、さらには学習者が選択した学術上の専門分野において用いる英語を習得することを目標とするからである<sup>3)</sup>。ESPの特徴は、1) 学習者は多くの場合成人であること、2) 学習に当てることができる時間はたいして限られること、3) 学問的背景や職業などに共通性があると予想されること、の3点である<sup>4)</sup>。ESPを実践する上ではESP教師による「学習者のニーズ分析」が重要であり、「学習者の学術上あるいは職業上のニーズに応える」<sup>5)</sup>ことが不可欠であるとしている。また、ESPは研究と実践が常に密接に結びつき、アンケートなどを利用したニーズ分析等の実践においての反省や新たな認識がESP研究の発展促進につながっている<sup>4)</sup>。

### Ⅲ. 日本の医療現場における現状と医学英語教育

2009年における日本国内の外国人登録者数は2,186,121人で総人口の1.71%に当たり、10年前の1999年と比較すると約1.4倍<sup>6)</sup>、およそ59人に1人の割合である。都道府県別に見ると外国人登録者数が最も多いのは東京都(415,098人)で、全国の19.0%を占め、以下愛知県、大阪府、神奈川県、埼玉県、千葉県、兵庫県、静岡県、茨城県、京都府の順で、上位10都府県(1,557,197人)で全国の71.2%を占める<sup>6)</sup>。特に近年増加が著しいのが「ニューカマー：日本に何世代かにわたり定住する在日韓国・朝鮮人など旧植民地出身者のオールドカマーと対照して使われる」と呼ばれる主にアジア、南米出身の外国人である<sup>7)</sup>。彼らが生産年齢人口である20歳代から30歳代に集中し、結婚、出産という過程の中で永住資格を取得する者が増加している<sup>7)</sup>。さらに、国土交通省観光庁が、観光立国を目指して進める「ビジット・ジャパン・キャンペーン」<sup>8)</sup>や日本のアニメーションをはじめとするサブカルチャーブームなどの影響で、外国人入国者数も急激に増加している<sup>9)</sup>。

このように来日外国人数の急増に伴い、医療におけるグローバル化への影響は避けることが出来ず、医学教育の現場では今後も急増する外国人患者に対応できる英語力を身につけた「医療人」を養成することが求められているのである。

### Ⅳ. 医学英語教育とESP

国内医療現場における急速なグローバル化から、医療従事者、ならびに将来の医療従事者である学生にとって英語習得は必要不可欠であり、スピーディーに効率よく学習をしなければならない。そのためにはまず学生のニーズを知り、そしてそれに見合った内容の講義をしなくてはならないのであり、こうした観点から、ESPを医学英語教育に取り入れることは非常に効果的であり、かつESPアプローチは医学英語教育においても大きな可能性を持つ。ESPの観点から医学部の教員、ならびに学生に対し行った一般及び専門英語教育に関する実態調査を基に新たなシラバスデザインの構築や教材開発における提言がなされている<sup>10)</sup>。また助産師学生に対する英語学習のニーズ調査においては、授業内容の検討や分析が行なわれ、その結果、「産科分野」の英語をより多く導入すると同時に、英語に苦手意識を持つ学生のために、英語を「楽しめる」工夫をし、彼らが達成感を持てるような講義内容を組む必要性があると指摘されている<sup>11)</sup>。「コメディカル(看護師、理学療法士、作業療法士など医療現場において医師と協同で働く専門職員)」<sup>12)</sup>養成過程のシラバス作成を目標に、学生並びに各課程の専門教員に質問紙調査が実施されているが、その結果として学生は外国人患者とコミュニケーションを行うための英語力を習得したいと望んでいるのに対し、教員は英語文献を読むための読解力を要求しているという、両者間に英語ニーズの「ずれ」が見られたという報告がなされている<sup>12)</sup>。医療系大学(鍼灸師、理学療法士養成課程)における学生のニーズ分析では、その結果をふまえてESP理論に基づいて作成した独自の英語教材を開発、使用しパイロット授業を行っている<sup>13)</sup>。これに加えて、英語の基礎能力と共に「学生の専攻、将来の職業に関連性のある実用的な英語教育を行うべき」<sup>13)</sup>とし、学生のニーズに応じたコース開発の必要性が強調されている<sup>13)</sup><sup>14)</sup>。ニーズ分析は英語学習を学習者に意識させ、それによって学習者自身が彼らの英語学習に対して確固たる目標を持つ「学習者中心」<sup>15)</sup>の姿勢を唱えるESPの観点から非常に重要な点である。

そこで次節ではESPの観点から、来年度以降の講義内容を検討してゆくべく鍼灸師学生に対し英語学習のニーズを中心に質問紙調査を行い、その結果を分析する。なお、本質問紙調査における項目は、

鍼灸師学生用に特化したものではなく、広くメディカル学生を対象としたものである。そのため、調査結果ならびに考察において、他校ではあるが同時期に同様の質問紙調査を実施した理学・作業療学科学生における結果と照らし合わせながら分析を進める。

V. 調査校における英語教育

今回筆者が調査を実施した神奈川県内医療系専門学校、鍼灸師科では平成 21 年度入学生は 1 年次前期に、平成 20 年度入学生は 2 年次前期に、15 回構成で医学英語教育が実施されている。実施学年が異なるのはあくまで調査校のカリキュラム上の問題である。授業で使用するテキストは、鍼灸分野に特化した内容ではなく、医学全般の内容を扱ったものであるため、扱う章の選定に関しては、文章や語彙などの面で出来る限り各学科の専門性に近似した内容を扱う部分を選択するよう配慮している。毎回の授業はクラスサイズ等の問題もあり、「読解＝読む」中心の授業を展開している。

学生の英語学習歴は入学時の年齢や最終学歴（高等学校卒業から大学院修士課程卒業まで）、社会経験の有無等から様々である。高校を卒業したばかりの学生と、社会経験もあり、大学院で修士号を取得した学生が一つの教室で同じ授業を受けるため、授業に対するニーズも多様にならざるを得ない。さらに、大半の学生が英語の授業以外では殆ど英語と関わることはない。今回質問紙調査を実施し、医学英語教育へのニーズを分析する背景にはこうした実態が影響している。

VI. 調査方法

質問紙調査は、「外国語（医学英語）」を受講した

鍼灸師科学生のうち、平成 21 年度生（1 学年、昼間部・夜間部）43 人、並びに平成 20 年度生（2 学年、昼間部・夜間部）23 人に対して前期授業終了時に実施した。参加した学生は当日授業に出席し、参加に同意を得られた者のみである。無記名、参加の自由、個人情報やプライバシー保護、および質問紙調査の回答によって不利益を被らないこと等、倫理的配慮を十分に行うことを学生に口頭で説明した上で、あくまで今後の授業内容改善のために質問紙調査を実施するゆえ、率直な意見を聞かせてほしい旨を伝えた。回収率は 100% である。それぞれの質問項目に対し、「4：そう思う、3：まあそう思う、2：あまりそう思わない、1：そう思わない」の 4 件法を導入し全て択一式とした。尚、本稿で使用する質問紙は先行研究<sup>10)16)</sup>に基づき作成した。結果は、学年を分けずに「鍼灸師科」として一つのデータとして処理している。母集団が少ないこと、また学科が異なっても医学英語教育を受ける期間とその内容は同一であるためである。

VII. 調査結果

質問紙調査によって得られたデータを表で示し分析した。各表における「平均」とは、4 件法で示された項目「4：そう思う、3：まあそう思う、2：あまりそう思わない、1：そう思わない」の平均値である。

1 英語への関心

項目 1「外国語に興味がない」では「そう思わない」が 47.0%、「あまりそう思わない」が 21.2%を示している。また項目 3「英会話に興味がある」では「まあそう思う」28.8%、「そう思う」が 37.9%、項目 5「英語圏の国に行きたい」に関しては、「まあそう思

表 1. 英語への関心 ( ) 内は回答件数

	そう思わない	あまりそう思 わない	まあそう思う	そう思う	平均
1. 外国語に興味がない	47.0% (31)	21.2% (14)	24.2%(16)	7.6%(5)	1.9
2. 英語以外の言語に興味がある。	12.1%(8)	25.8%(17)	33.3%(22)	28.8%(19)	2.8
3. 英会話に興味がある	13.6%(9)	19.7%(13)	28.8%(19)	37.9%(25)	2.9
4. 英語の音楽に興味がある	12.1%(8)	9.1%(6)	36.4%(24)	42.4%(28)	3.1
5. 英語圏の国に行きたい	16.7%(11)	18.2%(12)	21.2%(14)	43.9%(29)	2.9
6. 新聞や雑誌、インターネットの記事に興味がある	39.4%(26)	36.4%(24)	16.7%(11)	7.6%(5)	1.9
7. 英語の専門書に興味がある	54.5%(36)	25.8%(17)	12.1%(8)	7.6%(5)	1.7
8. 英語を使った仕事に興味がある	40.9%(27)	27.3%(18)	21.2%(14)	10.6%(7)	2.0

う」21.2%、「そう思う」が43.9%を示していることから、70%近くの学生が外国語に興味を持ち、英会話を身につけたり、英語圏の国に訪れたいという希望を持っていることが分かる。

それに対し、項目6「新聞や雑誌、インターネットの記事に興味がある」では「そう思わない」が39.4%、「あまりそう思わない」が36.4%を占め、項目7「英語の専門書に興味がある」では「そう思わない」が54.5%、「あまりそう思わない」が25.8%を、さらに項目8「英語を使った仕事に興味がある」に対しては「そう思わない」が40.9%、「あまりそう思わない」が27.3%を占めることから、雑誌やインターネットの記事、専門書など文字を使った媒体や仕事としての英語使用に対しては関心が低いといえる。

## 2 英語の到達目標

「話す」能力に関する設問である項目16「外国人と話したい」が「そう思う」42.4%、「まあそう思う」28.8%、項目17「海外旅行で困らない程度になりたい」では「そう思う」53.0%、「まあそう思う」

30.3%と突出して高い数値を示している。

次に「読む」能力に関する設問である項目11「一般的な文章が読める程度になりたい」は「そう思う」33.8%、「まあそう思う」26.2%、また項目9「英単語が読める程度」は「そう思う」31.8%、「まあそう思う」24.2%、項目10「専門用語がわかる程度になりたい」に関しては「そう思う」39.4%、「まあそう思う」18.2%と、決して低くない数値を示していることが分かる。

## 3 英語のイメージ

項目18「英語が読めると仕事ができそう」については「そう思う」34.8%、「まあそう思う」が27.3%、項目19「英語が書けると仕事ができそう」では「そう思う」33.3%、「まあそう思う」が30.3%を、さらに項目20の「英語がわかると評価される」では「そう思う」33.3%、「まあそう思う」が36.4%等、学生の「英語のイメージ」を測る設問に関しては全体的に高い数値を示している。

表2. 英語の到達目標

( )内は回答件数

	そう思わない	あまりそう思わない	まあそう思う	そう思う	平均
9. 英単語が読める程度	22.7%(15)	21.2%(14)	31.8%(21)	24.2%(16)	2.6
10. 専門用語がわかる程度になりたい	22.7%(15)	19.7%(13)	39.4%(26)	18.2%(12)	2.5
11. 一般的な文章が読める程度になりたい	24.6%(16)	15.4%(10)	26.2%(17)	33.8%(22)	2.7
12. 専門書が読める程度になりたい	28.8%(19)	28.8%(19)	27.3%(18)	15.2%(10)	2.3
13. 英語の文章が書ける程度になりたい	32.3%(21)	24.6%(16)	18.5%(12)	24.6%(16)	2.4
14. 英語を使って受験(大学、大学院)したい	65.2%(43)	22.7%(15)	7.6%(5)	4.5%(3)	1.5
15. 英語を使って専門的な活動がしたい	50.0%(33)	28.8%(19)	16.7%(11)	4.5%(3)	1.8
16. 外国人と話したい	10.6%(7)	18.2%(12)	28.8%(19)	42.4%(28)	3.0
17. 海外旅行で困らない程度になりたい。	10.6%(7)	6.1%(4)	30.3%(20)	53.0%(35)	3.3

表3. 英語のイメージ

( )内は回答件数

	そう思わない	あまりそう思わない	まあそう思う	そう思う	平均
18. 英語が読めると仕事ができそう	16.7%(11)	21.2%(14)	27.3%(18)	34.8%(23)	2.8
19. 英語が書けると仕事ができそう	18.2%(12)	18.2%(12)	30.3%(20)	33.3%(22)	2.8
20. 英語がわかると評価される	10.6%(7)	19.7%(13)	36.4%(24)	33.3%(22)	2.9
21. 英語がわかると嫌がられる	75.8%(50)	21.2%(14)	0.0%(0)	3.0%(2)	1.3
22. 外国で人助けができそう	18.2%(12)	28.8%(19)	28.8%(19)	24.2%(16)	2.6
23. 英語の記事が読めると格好いい	19.7%(13)	28.8%(19)	21.2%(14)	30.3%(20)	2.6
24. 外国人と話す道具である	16.7%(11)	9.1%(6)	31.8%(21)	42.4%(28)	3.0

表 4. 外国人に対するイメージ

( ) 内は回答件数

	そう思わない	あまりそう思 わない	まあそう思う	そう思う	平均
25. 外国人に接近したい	13.6%(9)	30.3%(20)	31.8%(21)	24.2%(16)	2.7
26. 人間なら外国人であろうと意識しない	13.6%(9)	31.8%(21)	24.2%(16)	30.3%(20)	2.7
27. 人種によっては近寄りがたい	31.8%(21)	28.8%(19)	22.7%(15)	16.7%(11)	2.2
28. 外国人は全て近寄りがたい	53.0%(35)	40.9%(27)	4.5%(3)	1.5%(1)	1.5

#### 4 外国人に対するイメージ

項目 25「外国人に接近したい」に関しては「そう思う」24.2%、「まあそう思う」31.8%、項目 28「外国人は全て近寄りがたい」では「そう思わない」53.0%、「あまりそう思わない」40.9%を始めとして、その他 2 項目においても肯定的な回答が高い数値を占めている。

#### 5 英語学習経験、興味

項目 30「もともと英語に興味がある」には「そう思う」28.8%、「まあそう思う」18.2%と、肯定的な回答を示す数値が高い。それに対し、項目 29「高校までの英語は得意だった」、項目 31「中学校卒業の時点で英語の成績は良かった」、項目 32「高校卒業の時点で英語の成績は良かった」に関しては「そう思う」「まあそう思う」合わせて 20 から 30% 台の回答であり、学生自身のこれまでの英語力に対する評価は高いとはいえない。項目 33.「専門学校に入れば英語は勉強しなかった」に関しては「そう思う」が 56.1 %、「まあそう思う」16.7%、項目 34「専門学校で英語を勉強する必要がある」に関しては「そう思う」が 12.1%、「まあそう思う」31.8%、さらに項目 36「専門学校の英語に期待して

いる」においては「そう思わない」39.4%、「あまりそう思わない」18.2%等の回答から、専門学校での英語学習を望まない、またはそれを想定していなかった、さらにはそれを期待していないと思われる回答が多い。

その一方で、項目 35「臨床現場で英語は必要だ」においては「そう思う」が 24.2%、「まあそう思う」42.4%と 66.6%が肯定的回答を示していることから臨床現場における英語の必要性は自覚しているものの、その認識が専門学校における英語学習に結びついていないことが分かる。

#### 6 英語力

項目 38「ABC が最後まで言える」、項目 39「辞書を引いて単語の意味を調べられる」に関しては「そう思う」、「まあそう思う」合わせて 90% 台を示し、また項目 42「あいさつ程度ならわかる」は「そう思う」、「まあそう思う」があわせて 67.7%と基礎的な英語力に関する質問事項に対しては高い肯定的回答率を示している。一方、項目 40「専門用語の意味がわかる」、項目 41「カルテの用語が何語でかかれているかわかる」等、専門分野の英語に関する質問事項に対しては肯定的回答率がそれぞれ 12.3%、34.4%と高くないことが分かる。項目 44「英語検定、

表 5. 英語学習経験、興味

( ) 内は回答件数

	そう思わない	あまりそう思 わない	まあそう思う	そう思う	平均
29. 高校までの英語は得意だった	50.0%(33)	22.7%(15)	12.1%(8)	15.2%(10)	1.9
30. もともと英語に興味がある	22.7%(15)	30.3%(20)	18.2%(12)	28.8%(19)	2.5
31. 中学校卒業の時点で英語の成績は良かった	42.4%(28)	21.2%(14)	16.7%(11)	19.7%(13)	2.1
32. 高校卒業の時点で英語の成績は良かった	47.0%(31)	27.3%(18)	10.6%(7)	15.2%(10)	1.9
33. 専門学校に入れば英語は勉強しなかった	10.6%(7)	16.7%(11)	16.7%(11)	56.1%(37)	3.2
34. 専門学校で英語を勉強する必要がある	28.8%(19)	27.3%(18)	31.8%(21)	12.1%(8)	2.3
35. 臨床現場で英語は必要だ	9.1%(6)	24.2%(16)	42.4%(28)	24.2%(16)	2.8
36. 専門学校の英語に期待している	39.4%(26)	18.2%(12)	27.3%(18)	15.2%(10)	2.2
37. 受験科目に英語がない専門学校を受けた	62.1%(41)	15.2%(10)	7.6%(5)	15.2%(10)	1.8

TOEIC などを受けたことがある」においても肯定的回答が35.3%と低く、英語力を高めるための検定試験を受験した経験をもつ学生はそれほど多くないことが分かる。

## Ⅷ. 考察

本章では英語の授業内容に関して、現状での問題点を述べた上で、来年度以降の講義内容や形式等について、前章で論じた質問紙調査結果とその分析をふまえて医療系専門学校における ESP 導入の可能性という観点から考察し提言を行っていく。

### 1 現状における問題点

今回筆者が調査を実施した神奈川県内医療系専門学校では、平成 21 年度においては、鍼灸師科同年度入学生は 1 年次前期に、平成 20 年度入学生は 2 年次前期に医学英語教育が実施されている。

使用テキストは、鍼灸各分野に特化した内容ではなく、医学領域の幅広い知識を習得するという方針の下、看護、医学領域の今日的な話題を扱ったものである。授業内容は「読解＝読む」中心で、その他の技能、つまり「話す」「聞く」「書く」を意識した内容の講義は不足しがちなのが現状である。「話す」に関しては平易な臨床会話表現を、各授業で扱うトピックの内容に応じて選定し、それらを紹介したうえで、ロールプレイ的形式で練習をする程度であり、扱う時間、量共に十分といえるものではない。

さらに調査校においては、学生の英語学習歴が多岐にわたっているため高校を卒業したばかりの学生と、社会経験もあり、大学院で修士号を取得した学生に対して同一内容の講義や課題が提供されているのが現状である。しかしそれは ESP の理念である「学習者に適した内容を提示する」<sup>15)</sup> ことに反する。そこで、学生個々人の基礎学力や学習進度、また能

力を把握しながら、一人一人にきめ細やかな指導がなされることが必要とされている<sup>17)</sup>。

### 2. 来年度以降の講義内容、及び形式に関して

本章では ESP 理論の考え方に基づき学生に実施した質問紙調査を基に分析した彼らのニーズ分析を踏まえ、来年度以降の講義内容に関して論ずる。言語学習においては一つの技能に偏ることなく 4 技能をバランスよく習得することが求められる<sup>2) 18) 19)</sup>。こうした点を踏まえた上で、本章では言語の 4 技能(「話す」「聞く」「書く」「読む」)を意識しつつ、鍼灸師学生にとっての、医療系専門学校における ESP 導入の可能性という観点から来年度以降の講義内容や形式等について検討する。

#### 1) 日本人教員と外国人教員とのティームティーチング

学生の質問紙調査からは 70% 近くの学生が「外国語に興味がある」、「英会話を身につけたい」「英語圏の国に行きたい」という希望を持っていることが分かった。しかし、理学・作業療法学科学生に対し行った同様の質問紙調査で得られた結果と比べると、その数値は低い。例えば、項目 3「英会話に興味がある」においては、鍼灸師学生の肯定的回答は 66.7% であるのに対し、理学・作業療法学科学生のそれは 76.3% であった<sup>19)</sup>。

英会話や英語圏の国々に対する学習への「動機付け」や「意欲」を高めるためには、外国人教員による会話表現練習を講義に導入することが望ましい<sup>19)</sup>。現役看護師対象に行われた質問紙調査によると、「医療従事者」<sup>20)</sup> に求められる、臨床現場で最も必要な英語力として「外国人患者とのコミュニケーション能力」<sup>20)</sup> が挙げられている。医学部学生に対して行われた質問紙調査結果から

表 6. 英語力 ( ) 内は回答件数

	そう思わない	あまりそう思わない	まあそう思う	そう思う	平均
38. ABC が最後まで言える	3.1%(2)	0.0%(0)	13.8%(9)	83.1%(54)	3.8
39. 辞書を引いて単語の意味を調べられる	1.5%(1)	6.2%(4)	20.0%(13)	72.3%(47)	3.6
40. 専門用語の意味がわかる	35.4%(23)	52.3%(34)	9.2%(6)	3.1%(2)	1.8
41. カルテの用語が何語でかかれているかわかる	39.1%(25)	26.6%(17)	14.1%(9)	20.3%(13)	2.2
42. あいさつ程度ならわかる	7.7%(5)	24.6%(16)	32.3%(21)	35.4%(23)	3.0
43. 街の英語標識などがわかる	15.4%(10)	38.5%(25)	33.8%(22)	12.3%(8)	2.4
44. 英語検定、TOEIC などを受けたことがある	53.8%(35)	10.8%(7)	13.8%(9)	21.5%(14)	2.0

は、学生が少人数制のもと、ネイティブ英語教師による会話の授業を求めていることが指摘されている<sup>10)</sup>。

こうした観点から、外国人患者との会話を想定したロールプレイングや臨床会話集を使った会話表現練習を、外国人教員(英語母語話者)による「少人数」体制下で行なうことを提案する。外国人教員による授業は、英語学習のみならず、これまで外国人と接することのなかった学生にとっては、外国人に対して拒否的にならないこと、ひいては異なる文化や言語をもつ人々を受け入れる心、つまり「コミュニケーション能力」<sup>21)</sup>を養う一つの好機になるとともに、こうした態度は医療現場においてのグローバル化や ESP の観点からも求められているといえる<sup>19)</sup>。

しかし外国人教員のための英語による授業では、英語の苦手な学生には「講義内容が聞き取れない」「内容が理解できない」など、学生をかえって英語嫌いにさせてしまうという弊害を生み出してしまふ可能性がある。特に、鍼灸師学生は理学・作業療法学科学生に比べ、英語に対する苦手意識が強いと考えられ、その懸念は大である。それは項目 29 と項目 32 の回答からも分かる。項目 29 「高校までの英語は得意だった」において、鍼灸師学生の 27.3% が肯定的回答をしているのに対し、理学・作業療法学科学生のそれは 31.6%、また、項目 32 「高校卒業の時点で英語の成績は良かった」においては、鍼灸師学生の 25.8% が肯定的回答をしているのに対し、理学・作業療法学科学生のそれは 34.2% と、両質問において鍼灸師学生が理学・作業療法学科学生に比べ肯定的回答が低い。<sup>19)</sup>

また、たとえ英語母語話者の外国人教員であっても「専門英語の場合は専門的な知識が必要である」<sup>3)</sup> ため、「英語母語話者」という条件のみで臨床英語会話の授業を担当することが可能であるとは言いがたい。さらに懸念されるのは、「コミュニケーション能力」を養うはずの授業が「無難な日常会話」<sup>22)</sup>あるいは「単なるお話し」のクラスに終始<sup>2)</sup>してしまうことである。こうした点を考慮すると、会話の授業では英語母語話者である外国人教員と専門知識を持った日本人英語講師とのチームティーチングが効果的ではないであろうか。苦手意識を持つ学生のためにグループワークで会話活動に参加させることも心理的負

担を軽減するための一つの形態である。チームティーチングとグループワーク形式を導入することで、一講義あたりのクラスサイズが大きい授業においても、ある程度「少人数」体制の指導が可能となる。ESP においては指導形態にこだわるのではなく、学習者に意欲を与える内容でなくてはならず、「英語で話したい」という意欲を学習者に起こさせることが何よりも重要である。また、ただ話すだけの授業で終わらせないためには、実際の診療現場において求められる「話す」力や「コミュニケーション能力」に関する詳細な調査や分析が求められる。

外国人教師を招聘することが困難であれば、在日外国人との交流や援助活動を授業の一環として導入することも可能な選択肢の一つである<sup>12)</sup>。外国人医療従事者との交流活動は学生の英語学習への動機付けを高める上で非常に効果的であり、また在日外国人が多く居住する神奈川県においては実現可能な教育実践の一つと言える。

## 2) 接頭辞、接尾辞からおさえた「医学英単語の習得」

前述のとおり、鍼灸師学生は理学・作業療法学科学生の回答と比較して自身の英語力を評価する項目への肯定的回答が低く、特に「読む」「書く」に関しては、学生の大半が英語に苦手意識を持っている。そのため学生全員に初めから医療ジャーナル記事などの「authentic な教材」を読ませたり、また英語論文を執筆させるなどの高度な課題を課すことは困難である。そこで、実際に「読む」前段階として「医学英単語の習得」から開始することが考えられる。しかし鍼灸師科学生の項目 9 「英単語が読める程度」に対する肯定的回答は 66.0%、また項目 10 の「専門用語がわかる程度になりたい」は 57.6% である。つまり理学・作業療法学科学生の肯定的回答である 85.9%、92.1% と比較すると、英単語や専門用語がわかるようになりたいという欲求は決して高いとは言えず、医学英単語を覚える負担を減らす必要があると考えられる。そのためには医学英単語の接頭辞や接尾辞の意味から押さえることが効果的である<sup>17) 23)</sup>。これらの意味を知ること、単語の意味推測がある程度可能となり、英単語や専門用語が分かるようになりたいという欲求が高くない鍼灸師学生に

とって、記憶のための負担が軽くなる。さらに扱うべき語彙の選定に関しては、コーパス・データを活用して医学英単語リストを作成し、効率的語彙指導を行なうことも効果的である。医学英語の分野においても、医学関連英語論文のコーパス分析がなされており<sup>11) 24) 25)</sup>、コーパス分析の結果、ある一定の語彙が「特徴語」<sup>15)</sup>として上位に出現し、また限定された少数の単語が繰り返し使われていることが確認されている<sup>16)</sup>。

コミュニケーション能力の育成という観点からも語彙の果たす役割は非常に大きい<sup>26)</sup>。項目39の「辞書を引いて単語の意味を調べられる」に関しては肯定的回答が92.3%と非常に高い割合を示すことから、辞書があれば単語の意味を、またひいては英文の内容をある程度理解できる能力を殆どの鍼灸師学生が備えていることが伺え、現状においても文章理解の素地は充分出来ていると推測される。なぜなら彼らは辞書を引きながらも最新の医療知識を獲得するために英語論文や医療ジャーナルの記事を読める、または読もうとする、「自律した学習者」としての要素を持っているからである。これはすなわち学習者の「自律性 (autonomy)」<sup>26)</sup>に他ならず、さらにはこの概念は「学習者中心」を標榜しているゆえに、同様の理念を基本として掲げるESPとの関連性も非常に深いのである<sup>28)</sup>。

### 3) E-メールやフェイスブックを活用した英作文指導

項目13「英語の文章が書ける程度になりたい」においては鍼灸師学生の肯定的回答が43.1%と、理学・作業療法学科学生の89.5%と比較し、非常に低い<sup>29)</sup>。

「書く」に関しては、ある話題について書いたレポートや作文を学生間で回覧し、それらをさらに推敲し「revise していくプロセス」<sup>18)</sup>を学ばせるというタスクが提案されている。しかし「書く」ことに対し意欲の低い鍼灸師学生には、従来型の「紙媒体での提出」では時間もかかるなどかえって敬遠する結果になるとも限らない。

そこで学生にとって身近な媒体である電子メールや、近年20代の若者の間で多く利用さ

れているフェイスブックを活用した英作文の提出方法を提案する。「書く」内容は、英語で日記を書かせたり、一日の出来事を報告するなど学生にとって身近で、かつ易しいテーマを設定する。電子メールやフェイスブックはパソコンのみならず、携帯電話を利用することも出来る上に、紙媒体に比べ訂正がしやすい。受信者となる教員や学生はそれを見て自分の意見を書き込んで返送したり、思い思いにコメントをしたりすることができる等、その手軽さと多様な用途から、「書く」ことに対し意欲の低い鍼灸師学生の「書く」ことへの拒否感や抵抗感も緩和され、英作文に対する苦手意識を軽減することができると考えられる。

このように、電子メールやフェイスブックを活用した英作文指導は「形成的評価 (学習におけるプロセスを評価)」<sup>12)</sup>を活用し、学習者に適した内容を提示する」というESPの理念に適った方法であるといえよう。

### 4) 英語教員と鍼灸分野専門教員、医療現場との連携

最後に、専門分野に照準を当てた英語授業の方法として鍼灸分野専門教員と英語教員、ならびに鍼灸治療院等、医療現場が協力、連携した授業、及びシラバス作成を提案したい。

学生や教員のニーズを反映させなければならぬことは言うまでもないが、そのみを満足させるような授業内容では十分ではない<sup>13)</sup>。なぜなら、現場での英語の必要性を認識することができるのは、他でもない「医療現場からの視点」であり、それらが英語学習者である学生の学習意欲を低下させないための最も重要な声となりうるからである。つまり、「医療分野専門教員と英語教員がコラボレートすること」<sup>15)</sup>で、英語教員のみでは対応が十分に出来ない医療分野の専門基礎知識を補完できると共に、かつそこに現場の声が加わることでESPの理念である学習者のニーズに適い、「学習者中心」<sup>30)</sup>の授業を展開できるのである。

## IX. おわりに

本稿ではESPの理論に基づいて作成された質問紙調査から鍼灸師学生のニーズを、同時期に同様の



質問紙調査を実施した理学・作業療法学科学生における結果と照らし合わせながら分析を進め、その結果から来年度以降の講義内容や形式等を検討した。今後はこれを基に適切なシラバス作成を進めてゆきたいと考えるが、その前提として卒業までに行うべき英語教育の目標を明確にした教育システムを確立することが求められる。さらに念頭に置かなくてはならないのは、言語学習において一つの技能に偏ることなく4技能をバランスよく習得する、つまり「バランスのとれた英語運用能力の向上」である。こうした観点から、現在の読解中心の授業内容に加え、「聞く」「書く」「話す」を補完すること、また鍼灸師領域に特化した講義内容が今後求められているといえる。

「明確な目標設定に基づいたシラバスの作成」はESPにおける考え方の基礎をなす。この大命題のために、質問紙調査による学生のニーズ分析を今後も継続してゆく考えである。

本稿で実施した質問紙調査は、対象となる母集団が小さいこと、また神奈川県内医療系専門学校の鍼灸師学科1、2年生のみから得られたデータであるため、分析には限界があり、有用なデータが導けると断言することは困難である。従って本稿における分析結果はあくまで一つの傾向に過ぎないが、今後も学生の学習成果を詳細に調査、分析しながら、常に謙虚な態度で自身の指導法や授業内容を振り返りつつ、学生のニーズに応え、彼らにとってより効果的な授業の実践、並びにシラバス構築に励んでゆきたい。

## 謝辞

今回の報告を作成するに当たり、質問紙調査に協力をしてくださった専門学校の教員の皆様と学生、並びにデータ処理に関しご指導を頂きましたGoodness Companyの水野谷里香先生に謝辞を表します。

## 参考文献

- 1) 白畑知彦, 富田祐一, 村野井仁, 若林茂則. 英語教育用語辞典. 大修館書店, 1999.
- 2) 清水雅子, 佐久川肇, 小林春男. 福祉系大学・短期大学における英語教材調査とリーディング教材開発研究. 川崎医療福祉学会誌. Vol.14, no.2, 2005, p.215-227.
- 3) 清水雅子. 基礎教育課程における医学・医療英語教育の実践と課題－ESPとしての医学・医療英語教育－. 川崎医療福祉学会誌. Vol.9, no.1, 1999, p.25-32.
- 4) 岡秀夫. 外国語教育学大辞典. 大修館書店, 1999.
- 5) 深山晶子. ESPの理論と実践－これで日本の英語教育が変わる. 三修社, 2000.
- 6) 法務省 (2010a). 「平成 21 年末現在における外国人登録者統計について」2010-07-06 (オンライン)、入手先〈[http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04\\_00005.html](http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00005.html)〉(入手 2010-08-24)
- 7) 李節子. 1. 在日外国人の母子保健医療の現状と課題－外国人の人口動態統計の分析から－. 小児科診療. Vol.58, 増刊号, 2005, pp.1145(5)-1161(21).
- 8) 国土交通省観光庁 (2009). 「『Visit Japan Year』実行委員会 (第 1 回) を開催!」2009-06-19 (オンライン)、入手先〈[http://www.mlit.go.jp/kankocho/news08\\_000022.html](http://www.mlit.go.jp/kankocho/news08_000022.html)〉(入手 2010-10-01)
- 9) 法務省 (2010b). 「平成 21 年における外国人入国者数及び日本人出国者数について (確定番)」2010-03-12 (オンライン)、入手先〈[http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04\\_00005.html](http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00005.html)〉(入手 2010-08-24)
- 10) 横山彰三. 医科大学における英語教育と ESP. ESP の研究と実践. no.2, p.70-77.
- 11) 鈴木由美. 過去 2 年間にみる医学英語に対する助産師学生のニーズ. 桐生短期大学紀要. no.18, 2007, p.137-140.
- 12) 永野喜子. 「日本のコメディカル養成過程における英語教育－アンケート調査結果に見られる医療現場のニーズと学生の意識との差. ESP の研究と実践. no.6, 2007, p.57-66.
- 13) 高木久代. 医療系大学における英語教育. 鈴鹿医療科学大学紀要. no.18, 2008, p.41-51.
- 14) Swales, J.M. 1990. Genre analysis: English in academic and research settings. Cambridge University Press.
- 15) 笹島茂. ESP を基盤とした医学英語教育. 埼玉医科大学基礎部門紀要. no.10, 2004, p.47-60.
- 16) 鈴木千鶴子. 医学・看護英語教育システム構築に向けたコーパス分析－臨床外科分野、医学英語論文のコーパス分析. ESP の研究と実践. no.6, 2007, p.15-30.
- 17) 鈴木由美. 専攻科学生と外国語について. 桐生短期大学紀要. no.15, p.131-137.
- 18) 五百蔵高浩. インターネットと英語教育. 四国英語教育学会紀要. no.16, 1996, p.31-40.
- 19) 杉山明枝. 医学英語に対する理学・作業療法士学生のニーズ. 日本医学英語教育学会会誌. no.9, 2010, p.39-47.
- 20) 西尾吉成. 看護科における ESP への橋渡し教材の重要性. 四国英語教育学会紀要. no.19, 1999, p.47-57.
- 21) 村野井仁. 第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法. 大修館書店, 2006.
- 22) 津田晶子. 大学必修英語における ESP の可能性と課題. ESP の研究と実践. no.1, 2002, p.96-105.
- 23) 飯田恭子, 平井美津子. アタマとオシリでわかる医療英単語. 医学書院, 2004.
- 24) 安浪誠祐. 医学・看護英語教育システム構築に向けたコーパス分析－共起検索ツールの開発と特徴および運用について. ESP の研究と実践. no.6, p.52-56.
- 25) 横山彰三. 医学・看護英語教育システム構築に向けたコーパス分析－「ゲノム分野」医学英語論文のコーパス分析. ESP の研究と実践. no.6, 2007, p.6-14.
- 26) 毛利公也. 高校における語彙指導－意味のネットワークによる語彙の整理と拡大－. 四国英語教育学会紀要. no.16, 1996, p.51-60.
- 27) 小池生夫. 応用言語学事典, 研究社, 2003.
- 28) 塚本倫久. 日本人英語学習者の語彙習得とコーパス. 文明 21. no.7, 2001, p.149-162.
- 29) 投野由紀夫. コーパスを英語教育に生かす. 英語コーパス研究. 英語コーパス学会, no.10, p.249-264.
- 30) 安浪誠祐. 医学英語教育のためのニーズ分析. ESP の研究と実践. no.4, 2005, p.91-99.

## Appendix

### アンケート用紙

1 年      2 年      昼間部      夜間部      男      女

最終学歴：

次の質問は、あなたの英語に対する考えを尋ねるものです。下記の質問に対し、次の4段階で評価し、該当する番号に○をつけてください。

4：そう思う    3：まあそう思う    2：あまりそう思わない    1：そう思わない

#### I. 英語への関心

皆さんの英語に対する興味、関心に関する質問です。

1. 外国語に興味がない	4	3	2	1
2. 英語以外の言語に興味がある	4	3	2	1
3. 英会話に興味がある	4	3	2	1
4. 英語の音楽に興味がある	4	3	2	1
5. 英語圏の国に行きたい	4	3	2	1
6. 新聞や雑誌、インターネットの記事に興味がある	4	3	2	1
7. 英語の専門書に興味がある	4	3	2	1
8. 英語を使った仕事に興味がある	4	3	2	1

#### II. 到達目標について

皆さんが英語をどの程度まで身につけたいかを尋ねる質問です。

9. 英単語が読める程度	4	3	2	1
10. 専門用語がわかる程度になりたい	4	3	2	1
11. 一般的な文章が読める程度になりたい	4	3	2	1
12. 専門書が読める程度になりたい	4	3	2	1
13. 英語の文章が書ける程度になりたい	4	3	2	1
14. 英語を使って受験（大学、大学院）したい	4	3	2	1
15. 英語を使って専門的な活動がしたい	4	3	2	1
16. 外国人と話したい	4	3	2	1
17. 海外旅行で困らない程度になりたい。	4	3	2	1

#### III. 英語のイメージについて

皆さんがもつ英語のイメージについて尋ねる質問です。

18. 英語が読めると仕事ができそう	4	3	2	1
19. 英語が書けると仕事ができそう	4	3	2	1
20. 英語がわかると評価される	4	3	2	1
21. 英語がわかると嫌がられる	4	3	2	1
22. 外国で人助けができそう	4	3	2	1
23. 英語の記事が読めると格好いい	4	3	2	1
24. 外国人と話す道具である	4	3	2	1

#### IV. 外国人に対するイメージについて

皆さんがもつ外国人に対するイメージについて尋ねる質問です。

25. 外国人に接近したい	4	3	2	1
---------------	---	---	---	---

26. 人間なら外国人であろうと意識しない	4	3	2	1
27. 人種によっては近寄りがたい	4	3	2	1
28. 外国人は全て近寄りがたい	4	3	2	1

#### V. 英語学習経験、興味について

皆さんが今までどのくらい英語を勉強してきたか、また英語学習に対する興味について尋ねる質問です。

29. 高校までの英語は得意だった	4	3	2	1
30. もともと英語に興味がある	4	3	2	1
31. 中学校卒業の時点で英語の成績は良かった	4	3	2	1
32. 高校卒業の時点で英語の成績は良かった	4	3	2	1
33. 専門学校に入れば英語は勉強しなかったと思った	4	3	2	1
34. 専門学校で英語を勉強する必要がある	4	3	2	1
35. 臨床現場で英語は必要だ	4	3	2	1
36. 専門学校の英語に期待している	4	3	2	1
37. 受験科目に英語がない専門学校を受けた	4	3	2	1

#### VI. 英語力について皆さんの英語力について尋ねる質問です。

38. ABC が最後まで言える	4	3	2	1
39. 辞書を引いて単語の意味を調べられる	4	3	2	1
40. 専門用語の意味がわかる	4	3	2	1
41. カルテの用語が何語でかかれているかわかる	4	3	2	1
42. あいさつ程度ならわかる	4	3	2	1
43. 街の英語標識などがわかる	4	3	2	1
44. 英語検定、TOEIC などを受けたことがある	4	3	2	1

ご協力ありがとうございました